



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4357号 2018.5.4 発行

障害者雇用促進へ新会社 伊予銀、特例子会社めざす 日本経済新聞 2018年5月2日



伊予銀行は2日、障害者の雇用を後押しする子会社「いよぎんチャレンジ&スマイル」を、松山市の事務センター内で開業した。2014年に開設した障害者の専門事業所が軌道に乗ってきたことに対応する。グループ以外の仕事を受注し、親会社と一体で障害者の雇用率を算定できる特例子会社の認定取得をめざす。

織物製作の作業を見学する伊予銀の大塚頭取(左)ら(2日、松山市)

伊予銀によると、認定を受ければ愛媛県内の企業では7例目。四国の金融機関では珍しいという。

障害を抱えるスタッフ13人、管理スタッフ3人でスタートした。顧客に配布する同行マスコットキャラの木工グッズや、今治タオルの残糸を利用した織物の製作を行う。新たに伝票つづりの製本など、銀行の事務作業も受託する予定だ。

2～3年後をメドに25人規模に雇用を拡大する。同日の開業式典で大塚岩男頭取は「特例子会社の認定を受ければ、グループ以外の仕事もできるようになる。自立した会社をめざしたい」と期待を込めた。

伊予銀によると、同行の障害者の雇用率は民間企業の法定雇用率(2.2%)を上回っているという。

精神障害者家族 日常的ストレス73% 地域で孤立「支援急務」

毎日新聞 2018年5月3日

精神障害者の家族の7割以上が日常的なストレスを抱え、6割の親の精神的な健康状態が悪いことが、各地の家族会などでつくる公益社団法人「全国精神保健福祉会連合会(みんなねっと)」(東京都豊島区)のアンケートで判明した。家族からは、相談体制の充実を求める切実な声が相次いだ。【成田有佳】

当事者の自立した地域生活を進め、家族も安心できる支援のあり方を探ろうと、同会が2017年10～11月、障害者の家族である全国の会員ら7130人にアンケートした。回答を得た3129件の障害者との関係の内訳は、親85%▽きょうだい8・5%▽配偶者4・2%など。

調査結果によると、「日中何もしていない」と家族が回答した精神障害者は20・2%に上っていた。障害者の就労を支援する事業やホームヘルパーの利用といった障害者総合支援法に基づく障害福祉サービスについては、39・8%が「どれも利用していない」と回答した。障害が重い人ほど割合は高くなっており、同会は、重度の精神障害者が一日中自宅で過ごしている可能性があるともみている。

家族に対してうつなどの症状など気分障害の可能性を聞いた項目では、73・3%の家族が日常的にストレスを抱え、60・4%の親が精神的な健康に問題があるとの結果が出た。「親

亡き後が心配」（80代女性、親の立場）、「常に不安を感じてストレスがたまる」（70代男性、きょうだいの立場）といった声が寄せられ、必要な支援を尋ねた質問（複数回答）では「24時間相談に乗ってくれること」などが5割を超えた。

同会の小幡恭弘事務局長は「家族の高齢化が進む中、地域の中で障害者とその家族が孤立している。家族を含めた支援が急務だ」と話している。調査内容をまとめた報告書は880円（送料込み）。問い合わせは、同会（03・6907・9211）まで。

アルコール依存症、対策進む 年度内に15都県が計画策定 産経新聞 2018年5月3日

多量飲酒やアルコール依存症をなくすための対策推進計画について、今年度中に策定予定の自治体が15都県に上ることが、厚生労働省の調べで分かった。すでに27道府県が策定済みで、残りは5県。依存症の相談拠点も年度内に18自治体（政令市含む）が設置見込みで、設置済みを含めると全国で計26自治体になる。急ピッチで対策が進められている。

アルコール健康障害対策基本法（平成26年施行）は、都道府県に対し対策推進計画を策定するよう努力義務を課した。計画には、アルコールで健康障害を起こした人の相談や治療、依存症の人が必要な治療を受けられる体制の整備などが記載される。

3月に策定した岩手県の計画は、小学校から飲酒の影響についての教育を施すことや、職場での適量飲酒の啓発を明記。昨年9月に策定した大阪府は、自殺未遂や児童虐待などで飲酒が関連する場合、「関係機関が適切な介入を行うこと」を盛り込んだ。

策定が未定の福井県は「アルコールだけか、それともギャンブルなど他の依存症と一緒にできるか区分けが難しい」としている。

25年の厚労省研究班の調査によると、アルコール依存症の人は約109万人と推計。予備軍として多量飲酒者が約980万人いるとされる。医療機関で治療を受けている患者数は厚労省の調べで約4万9千人（26年）と推計。自殺者の2割以上にアルコール関連の問題が見られるという。



アルコール依存症

世界保健機関(WHO)の診断基準

- 飲酒への強い欲求・強迫感
- 節酒不能(コントロール障害)
- (飲酒しない間)手の震え、発汗、不眠などの症状
- 耐性の増大(酒に強くなる、飲んでも酔えない)
- 飲酒や泥酔からの回復に時間を浪費。飲酒以外の娯楽を無視
- 問題があることを知っているのに飲酒を続ける

※6項目のうち同時に3つが1年のうち一時期生じるか、繰り返し起きる

手話通訳 タブレットで

読売新聞 2018年05月03日

◇新居浜市 支所・自宅で行政相談

新居浜市は、聴覚障害者が支所のタブレット端末や個人所有のスマートフォンを使って本庁舎の手話通訳者とやり取りができるシステムを導入し、5月から運用を始めた。従来は地域福祉課の手話通訳者と面談したり、支所で職員と筆談したりしていたが、新システムでは最寄りの支所に足を運ぶか、自宅で私有スマホを使えば行政上の相談などが可能になる。

タブレットやスマホのカメラ機能を使う市内のソフトウェア開発会社のシステムを利用

し、新たなアプリは不要。

聴覚障害があり、手話のできる市民約30人が対象で、希望者は登録すればIDとパスワードが付与され、専用の入力画面からシステムに入る。支所のタブレット端末を使う横井さんに、本庁舎で応じる児玉さん（新居浜市役所で）

タブレット端末は川東、上部、別子山の全3支所に配備され、手話通訳者2人が地域福祉課のパソコンを使って対応する。既存のソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）などを使わないため、盗聴される危険性もない。導入費用は約100万円。

1日の開始式で、聴覚障害者の同課職員横井加奈子さん（36）が川東支所でタブレット端末を使い、住民票に関する相談について、同課の手話通訳者の児玉真弓さん（55）と手話でやり取りした。

横井さんは「耳の聞こえない我々には、とても便利なシステム。ぜひ多くの人に使ってほしい」と話した。



夏秋もアスパラ収穫 長野県が試験栽培、生産増狙う 日本経済新聞 2018年5月2日



長野県は主要作物の1つであるアスパラガスの夏秋生産に向けた試験栽培を6月に小布施町で始める。栽培と収穫を障害者雇用施設に委託し、土壌などに与える影響を調べる。県産アスパラの収穫は春に偏っている。夏秋は果物などの作業に追われ、畑の状態が悪くなる農家が多かった。生産者の裾野を広げ、収穫安定につなげる。

長野県のアスパラ出荷量は全国の1割を占める

試験栽培に協力するアスパラ農家は3戸で、畑は合計30アール。小布施町の社会福祉法人「くりのみ園」が、6月上旬から10月上旬までアスパラの栽培を担う。収穫したアスパラはそのまま、くりのみ園の収入とする。

アスパラを夏秋に収穫せず畑を放置した場合、茎枯病などの病気が広がり、翌春の生産量減につながっていた。県野菜花き試験場によると、夏秋にアスパラを収穫することで、翌年春の単位当たり収量は36%増える。県は春の生産量を増やすためにも夏秋のアスパラ栽培が必要とみている。

北関東や九州といった産地は夏秋にもアスパラを収穫することが多い。県園芸畜産課によると、ブドウをはじめ果物の生産がさかんな長野県では、夏秋は農家が果物の生産に多くの人員を割く。アスパラ畑は放棄されやすかったという。

県は試験栽培を通じて得たデータを基に、農家にアスパラ夏秋栽培の重要性を説く。JAの出資法人などに夏秋の生産委託も推奨する。県によると、アスパラ栽培で農家以外への生産委託に取り組む都道府県は全国初という。

農林水産省の作物統計調査によると、長野県のアスパラ出荷量は全国の1割を占める。県産アスパラは近年需要が高まり、価格が上昇傾向にある。JAによると2010年度に99円だった1束当たりの平均流通価格は16年度には122円まで上昇している。

県は5～6月に「北信州アスパラフェア」と称して北信の飲食店でアスパラの限定メニューを出すなど販促を進めている。一方で生産が追いつかず、収穫増が課題だった。

旧法務府が強制不妊認める通達 1949年に 読売新聞 2018年05月03日

旧優生保護法に基づき知的障害者らが不妊手術を強制された問題で、旧法務府（現法務省）が1949年、強制手術を認める見解を文書で示していたことが、読売新聞の情報公

開請求に対して愛知県が3月に開示した文書でわかった。

文書は49年、「強制優生手術実施の手段について」と題し、法務府が旧厚生省（現厚生労働省）公衆衛生局長あてに作成。厚生省は62年、岐阜県の照会を受けて都道府県に周知した。

文書では強制手術に対する法務府の見解として、「必要やむを得ない限度において身体の拘束、麻酔薬施用又は欺罔（欺くこと）等の手段を用いることも許される場合があるものと解すべきである」と明記。この解釈が基本的人権の制限を伴うことを認める一方で、公益上の必要性から、「憲法に背くものであるということとはできない」としている。

強制不妊 新たに12人分資料...府

読売新聞 2018年5月3日 京都

◇1958年度の手術申請書

旧優生保護法（1948～96年）に基づき、知的障害者らが不妊手術を強制された問題で、府は2日、手術を受けた可能性がある12人分の資料が新たに見つかったと発表した。既に公表している女性1人と合わせ、個人が特定できる資料は計13人分となった。

厚生労働省が3月下旬、関連文書の保管を求めるよう各都道府県に通知したことを受け、府が府立京都学・歴史館（左京区）で保管している未分類の約1万6000冊を調べたところ、12人分の名前や住所、生年月日、性別などが書かれた「優生手術申請書」が見つかった。作成は1958年度で、府が把握している同年度の手術人数とも一致するという。

府は電話相談に応じており、平日午前9時～正午と午後1～5時に、府こども総合対策課（075・414・4580）。

加害男性から手紙届かず 神戸連続児童殺傷事件

神戸新聞 2018年5月3日



取材に応じ、心情を語る土師守さん＝神戸市中央区（撮影・斎藤雅志）

神戸市須磨区で1997年に起きた連続児童殺傷事件で、亡くなった土師（はせ）淳君＝当時（11）＝と山下彩花ちゃん＝当時（10）＝の遺族に宛て、当時14歳だった加害男性（35）から命日の前に継続して送られてきていた手紙が、今年は届いていないことが弁護士らへの取材で分かった。淳君の命日は5月24日。父守さん（62）は「（男性にとって）手紙を書く行為が向き合うことになる。反省していないのではないか」と語る。

手紙は、加害男性が医療少年院を仮退院中の2004年8月に初めて届いた。その後は命日が近づくと、男性の両親の代理人弁護士を通じて、遺族に渡されてきた。しかし男性は15年6月、遺族の承諾を得ずに事件の様子などをつづった手記を出版。16、17年も弁護士に手紙が託されたが、両遺族は受け取りを拒否した。

弁護士によると、両遺族への手紙は近年、彩花ちゃんの命日（3月23日）前の2～3月に届いていた。昨春以降は男性と連絡が途絶えており、「今年は届かない可能性が高い」とする。

淳君の父守さんは「私たちが手紙を受け取るかどうかと、（男性が）手紙を書くことは別の話。未来永劫（えいごう）、受け取らないつもりはない」とした上で、「なぜ子どもを殺したのか。その『なぜ』を知るために、決して楽な作業ではないが、手紙を読んできた」とする。

彩花ちゃんの父賢治さん（69）は「彼が手記を出版した時から一切関わりたくないと考えてきた。罪の意識を持って歩んでいるとは思えず、過去の手紙も、本心か分からない。もし手紙が送られてきても読む気はない」と話す。（小林伸哉、石川 翠）

激しい疲労や痛み…「筋痛性脳脊髄炎」 品川で5日、患者ら啓発イベント



東京新聞 2018年5月3日

「筋痛性脳脊髄炎の患者の苦しみを多くの人に理解してほしい」と話すマーク雅子さん（下）と支援者の天野さん

日常生活に支障を来すほどの激しい疲労や消耗を主症状とする「筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群（ME／CFS）」の患者らが5日、啓発イベント「ひとりじゃないよ！」を品川区東大井5の「きゅりあん（総合区民会館）」で開く。目に見えない障害のため「怠け者」と誤解されやすいこの病気に対する理解を広めようと、ドキュメンタリー映画の上映や専門医の講演会を行う。（上田融）



主催するのは、自らも約十八年間にわたりME／CFSの闘病を続けるマーク雅子さん（48）＝品川区＝。

啓発シンボルカラーの青いリボンとTシャツ＝マーク雅子さん提供

雅子さんは豪州の大学院在学中の一九九五年から、シドニーで語学学校を経営。世界各地から留学生を受け入れ現地で結婚もした。

だがそれから五年後、日本に一時帰国中、インフルエンザのような症状になった。薬をもらい豪州に戻ったが、認知機能の低下に陥った。学校には夫に体を抱えてもらい出勤。いすに座るのもつらく、職場の床で横になるような状態になった。医師に相談しても最初は「うつ病ではないか」と言われた。

た。

ME／CFSと診断されたのは二〇〇六年。病名が分かってからは、理解者を増やそうと、闘病記や海外の治療情報発信のため豪州でブログを開始した。一二年には日本に帰国、夫とともに「まーくハウス&ぶろじえくと」という組織を作り、海外のME／CFS情報の翻訳・配信、署名活動などを地道に行っている。

イベントは、五月十二日がこの病気の世界啓発デーに当たることにちなんで行う。雅子さんが翻訳した英国のME／CFS患者を取りあげた映画「闇からの声なき声」を上映、角田亘・国際医療福祉大学教授が治療に関する講演を行う。啓発カラーの青い服やリボンをまとめて患者を励ます記念撮影などもある。

雅子さんは「この病気は痛いしつらいし、周囲に理解してもらいにくいので患者は孤立しがち。でもあなたは一人じゃないんだよ、というのを伝えたい。そして一人でも多くの人に病気のことを知ってほしい」と話す。参加費無料。原則事前予約制だが当日参加も可。申し込みは氏名、住所、電話番号、患者かどうかを記しメールで支援者の天野友里子さん＝may-storm@i.softbank.jp＝へ。

親ありて 書家・金澤翔子さんの母 泰子さん／上 基本培った「涙の般若心経」

毎日新聞 2018年5月2日

ダウン症の書家、金澤翔子さん（32）は5歳の時、母親の泰子さん（74）の指導のもと、書道を始めた。今では全国各地で個展を開き、1人暮らしもしている。知的障害を持って生まれてきた我が子を、どう育ててきたのか。泰子さんは「どうすれば一人で生きていけるようになるかを考えてきた」と振り返る。すべては翔子さんの自立のために。

泰子さんは42歳の時、翔子さんを出産。翔子さんは敗血症で別の病院に搬送されたため、泰子さんが我が子のダウン症を知ったのは生後41日目だった。ダウン症児は800

～1000人に1人の割合で出生するといわれ、心疾患や知的障害を伴うことが多い。



ダウン症と知った時、泰子さんは背筋が凍った。医師から「知能が低くて、たぶん歩けないだろう」と言われ、涙にくれた泰子さんは、その日の日記にこう記した。「生涯で最も深く辛（つら）い絶望だ」。殺してあげなければと思ったこともある。私の命と引き換えでも構わないから治してくれ、と祈ったこともある。でも、奇跡は起こらなかった。



1歳の誕生日を祝う翔子さんと



父親の裕さん＝泰子さん提供

芝生の上を笑顔で歩く＝泰子さん提供



書道を始めたころ。一生懸命、練習に励んだ＝泰子さん提供

書道一筋で生きてきた泰子さんは翔子さんが5歳の時、「お友達をつくるため」と

考え、自宅で書道教室を開いた。初めてなのに上手に筆を持つ翔子さんの姿を見て、「この子はうまくなる

可能性を秘めている」と感じた。

翔子さんは地元の公立小学校に入学し、普通学級に通った。ある日、泰子さんが「先生、申し訳ありません。お手数かける子で」と話すと、女性教諭は「翔子ちゃんがいるクラスは穏やかな子が増えるし、優しくなるから、いいの」と言われた。翔子さんは何をしても最下位だったが、「ビリの子がいれば、クラスは穏やかになるのか。初めて翔子がいいんだと思った」と泰子さん。「翔子にはビリという役目がある」と考え、その覚悟を持ったら楽になれた。

しかし、4年生からは現在でいう特別支援学級のある小学校へ転校を余儀なくされた。泰子さんは悲しくて自宅に引きこもり、半年ほど翔子さんを休学させてしまった。翔子さんはこの自由な時間を使って、自宅で「般若心経」を書き写し始めた。全部で276文字。半年で10巻ほどを書き、この時の約3000字で楷書の基本と持続力が身についた。泰子さんは筆の運び方などを厳しく指導し、翔子さんは泣きながら書いた。書には涙の跡が残り、これがのちに「涙の般若心経」と呼ばれる作品となった。

学校を休んでばかりもいられず、仕方なく自宅から遠い学校に登校させると、翔子さんは喜んで通った。電車に乗ることも覚えた。「翔子は苦しんでいなかった。苦しんでいたのは私だけだった」。遠くに行く時も最初是一緒に行き、「お母さんは二度と来ないよ」と伝えた。そして、次は一人で行くようにした。子どもの力を信じ、何でも一人でさせた。

会社を経営していた父親の裕（ひろし）さんは、翔子さんを「1000人に1人授かる子だ」と誇りを持って育てた。しかし、翔子さんが14歳の時、心臓発作で突然倒れ、52歳という若さで亡くなってしまった。裕さんは「翔子が20歳になったら個展を開こう」と話していたというが、泰子さんはこの時、翔子さんが書家になるとはまだ思っていなかった。【田口雅士】

1985年 東京都目黒区生まれ

- 90年 書道を始める
- 95年 「般若心経」を書く
- 2005年 初個展を開く
- 09年 建仁寺に「風神雷神」を奉納
- 12年 NHK大河ドラマ「平清盛」の題字を担当
- 15年 国連本部でスピーチ
1人暮らしを始める

親ありて 書家・金澤翔子さんの母 泰子さん／下 娘の力信じ「世界一幸せ」

毎日新聞 2018年5月3日

5歳から書と向き合ってきた金澤翔子さん（32）。書家で母親の泰子さん（74）は、ダウン症の我が子が自立できるよう二人三脚で歩んできた。「苦しい時は書道でしのいだ」と振り返る。

翔子さんは高校卒業後、作業所で働くことが決まっていたが、泰子さんと作業所との間に起きた小さなトラブルが原因で就職できなかった。再び、2人で自宅に引きこもる日々。そこで、翔子さんは大きな作品を書き始めた。

父親の裕（ひろし）さんが生前話していた通り、翔子さんが20歳の時、東京・銀座の銀座書廊で初めて個展を開いた。泰子さんは「生涯で1回限り」と思い派手に催した。図録も作った。それは、自分がこの世を去る前に、翔子さん自身を証明できるものを残しておいてあげたい、という親心からだった。個展には多くの人々が来場。翔子さんにしか表現できない世界観に触れ、涙する人もいた。この個展を機に、翔子さんは書家と呼ばれるようになっていった。



代表作でもある「風神雷神」

「書の神様が降りてきたとよく言われるけれど、本当に『降りてきた』書が翔子には五つか六つある。説明不可能な素晴らしい字」と泰子さん。京都の建仁寺に、国宝である俵屋宗達の「風神雷神図屏風（びょうぶ）」と並んで展示されている書「風神雷神」がその一つ。風神と雷神が舞い降りたような躍動感にあふれている。翔子さんが24歳の時の作品だ。泰子さんは「翔子は宗達の風神雷神を見たことがないのに、宗達の絵と翔子の書の構図が同じ」と驚き、「国宝と並ぶなんて書家にとっても夢のまた夢のような話」という。26歳の時には、NHKの大河ドラマ「平清盛」の題字も担当し、話題となった。

国連本部でスピーチ

翔子さんの活動の幅は書だけにとどまらない。29歳の時、米ニューヨークの国連本部で開催された「世界ダウン症の日記念会議」に出席。白地に紅色の花が映える着物姿で登壇した翔子さんは「『お父様、うまく書けますように』と祈って書いています」とスピーチした。着物は、翔子さんが15歳の時に亡くなった泰子さんの妹、美代子さんのものだった。そばで見守ってほしいという思いを込めた。



また、20代の時から宣言していた「30歳での1人暮らし」を2015年12月に始めた。料理中に一度だけ手に軽いやけどを負った以外は大きな事故もなく、泰子さん

は「大成功。ダウン症でも1人暮らしができる可能性を示した」と評価している。

翔子さんの自立は、泰子さんの「終活」でもある。障害を持つ子の親は、産んだ時と自分が死ぬ時、二度苦しむという。翔子さんが自立して生活できるよう、保育園児の時から包丁を持たせた。習い事もバレエや太鼓、太極拳など、いろいろさせた。翔子さんは知的障害があるため、学歴社会とは離れた世界で生きてきた。競争心がなく、人を羨んだり妬んだりしない。「すごく幸せな世界で生きている。親ができないと思ったり、不安に思ったりすることは、子育てにはマイナスだ」と泰子さん。



20歳で初めて個展を開く＝いずれも泰子さん提供

翔子さんは、これまで300回以上も個展を開催。会場では、小さな体を使って大きな作品を実際に書いてみせ、書き終わるとマイケル・

ジャクソンの曲に合わせて踊るなどサービス精神も旺盛だ。再来年まで仕事の予定が入り始めているほどの人気で、今月6日までは神奈川・鎌倉の建長寺で10回目の個展を開催している。

「生涯で最も深く辛（つら）い絶望だ」と日記に書いた日から32年余。「世界一、幸せな母親になれた」と泰子さん。同じ悩みを抱える親たちに対し「障害があっても子どもの力を信じて、何でもやらせてあげてほしい」と力を込めた。【田口雅士】

鎌倉でダウン症書家の個展 金沢さん、共生社会訴え 産経新聞 2018年5月2日



自身の作品「ともに生きる」の前で共生社会の大切さを伝える金沢翔子さん（左）＝2日、神奈川県鎌倉市

ダウン症の書家として知られる金沢翔子さん（32）の個展が2日、神奈川県鎌倉市の建長寺で始まった。知的障害者19人が犠牲となった2016年7月の相模原殺傷事件を受けて取り組んだ作品も展示し、共生社会の大切さを訴えている。6日まで。

金沢さんは事件後、県が共生社会の実現を目指して策定した憲章にちなんで「ともに生きる」と、犠牲者を悼んだ「祈」の2点を揮毫した。「祈」は事件が起きた相模原市の「芹が谷園舎」の園長室に飾られている。

金沢さんは来場者との写真撮影に応じながら、憲章を周知するチラシを配布。「みんなが元気で幸せに暮らせるよう願って書きました」と声を弾ませていた。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行